墮落したる自然主義

目白幼稚園　和田實

自然主義の取込まれたること、幼兒教育に於けるより甚だしきは、外にはあるまいと思はれる位に徹底した遵奉振りである。何處の幼稚園でも、「幼兒の自然生活」と云ふことは、保育上の凡ゆる事項を決定する最後の鐵則となつて居る。從つて「童心を虐げるな」「より能く活かせよ」等の標語は到る處で、提唱されて居る。誠に結構なことである。併し弊害は何物にもあるもので、此自然主義も、眞に能く理解されて居る所ばかりとは云へぬ樣である。先日も、都下の某園長は話して居た。曰く。此主義に因つて養成せられた一保姆が、幼兒同志の喧嘩を捌く樣子を見て居ると、つかみ合ひ、引搔き合ひの結果、一方が泣き出す迄は默つて見て居る。そして、一方が泣き出すに及んで、始めて其泣き出したる方の幼兒をだましすかしては居たが、腕力的に勝つた方の子供には何等の處置も採らなかつた。此勝つた子供は、大勢の中に幅をきかせて、衆兒を部下の兵卒の樣に指揮命令し、積木でも、繪本でも、恩物でも、己れの欲しいものは他人の玩んで居るものでも、遠慮なく取上げて使用する。たまに拒みでもするものあれば、直に、腕力に訴へて打つたり引搔いたりする。幼稚園に於ける王樣の樣な横暴振りであるが、先生は一向之を矯め樣としない。そして先生曰く「是れが幼兒社會の自然である。之を强ひて矯正せんとすれば、角を矯めて牛を殺すの愚に陷る」と稱して居たが、果して是でよいものだらうかと、又曰く、他の一保姆は、時間を一定して、一齊に遊戯を課することは幼兒の自然生活を破壞するものであると稱して、一齊遊戯を課さず一定の作業を爲さしめず、常に自由にして、何時も幼兒の氣任かせである。二三の幼兒が「先生唱歌してよ」と

請求すれば直に、唱歌を始めるが、唱歌する氣のなきものは勝手に遊んで居る。お話を聞かせて居る時にも倦きたる子供は自由に室の他方に出て行くが、別に何等の處置をも採らない。作業をやり掛けて止めるもの、一つの作業から他の作業へと、やり掛けにして移り行くものも何時も其自由に任かせて居つて、何等の處置もなされない。是等は、果して、是で、よいものであらうか、見て居て心配で堪らない。と又曰く、此保姆は子供の言葉使ひを構はない。從つて、二三ヶ月の中に子供の言葉は著しく野卑になり、ぞんざいになつた。行儀、作法は崩れた。家庭からは子供が粗暴になつたと云ふ苦情が頻々と來る。果して是でよいのであらうかと。又曰く、然るに此保姆先生は九時の開園時刻に遲れ勝の出勤で、出勤しても、彼方へぶらり、此方へぶらりと園内を漫歩し、時には一ヶ所に佇立するだけで、何等の活動をもしない。時々、子供にせがまれて、鬼ごつこやお話や、遊戯などして居るだけで、遊戯中にふざけて居るものがあつても、別に制することはなし、拔けて行くものは追はず、入つて來るものがあれば拒まずと云ふ態度であるが、是が果してよいのであらうかと。又曰く、此保姆が時に、子供を一齊に集めることがあるときは、重に自由畫を描かせるか又はお話をする時である。計劃的な作業や新らしい遊戯などは赴任以來まだ見たことがない。と云つて居た。

此園長の觀察に誤りなしとは云へまいが、此保姆の行り口にも誤なしとは云へぬ樣に思ふ。

自然主義は墮落すれば放任主義になるのは當然の歸結である。放任すれば子供は野性を發揮する。野性を發揮することになれば自然、餓鬼大將式王者の出來るのは當然のことである。

教育は目的を有する計劃的事業である。之を自然の形に於て、幼兒に與ふる所に、吾人の仕事がある。目的もなく、方針もなく、漫然として幼兒の自然生活を是事とするのは教育ではない。牛豚を畜養するにしても、牧畜者は希望と方針とを以て居る。牛豚の生活を其自然に任すのみが牧畜ではない。より好き種類を產ませ、より好き收益能率を得やうと云ふ

のが牧畜の目的である。幼兒に教育を施す亦然りである。然るに、自然主義者の或人は云ふ「教育の目的なぞゝ考へるから、子供に干渉し、子供を制裁し、子供を威壓して、其自然生活を損ふのである。教育の目的なぞ先づ忘れて、子供の自然生活を遵奉せよ」と云ふ。言にして云へば教育の目的を忘れて、子供の自然生活を尊べと云ふのであるが、是果して教育者の言であらうか。是が果して、教育であらうか、吾人は之を疑ふものである。尠くとも、教育の目的を忘れて居る間は教育ではないと思ふ。

由來、教育上の自然主義とは「自然の發達に副ふて教育を施せ」と云ふ意味で、自然其ものが教育であると云ふ意味ではない。然るに、此主義者は、自然生活其者は既に教育である。と考へて居るのである。是が抑〻誤りの基である。自然の生活其ものは決して、直に教育にはならぬ、子供の自然的生活は蕃人の生活に近似して居る。此未開人の生活を以て直に今日の文明人の教育を意味するとは餘りな獨斷ではないか。此見易き道理を考へないで、未開人の生活に等しい子供の自然生活其ものを以て直に教育的生活であると妄斷するのは無考の甚だしいものである。「自然の發達に副ふて教育せよ」と云ふのと「自然其まゝを尊べ」と云ふのとは大部懸け離れた相違である。教育上の自然主義とは自然其まゝであれと云ふのではなくて自然に副ふて教育せよと云ふのである。然るに、墮落したる自然主義者は唯自然其まゝを育てやうとする。自然其まゝを育てやうとするならば何も教育の何のと大騒ぎすることは要らぬ筈である。それこそ乞食の子も三年經てば三つになる主義でよい譯であるが、是は教育主義ではなくて放任主義即ち非教育主義であると云はねばならぬ。

ベルギーのドクロリーが「生活することに因つて生活へ」と云ふ標語を掲げて「生活即教育」の所謂生活主義を唱へて以來被教育者の生活全體を支配することに因つて教育しやうとする主義方針を誤解して、子供の自然生活が其まゝ教育である、是が即ち「生活即教育」であると解して居るものがある。是も一種の墮落したる生活主義である。生活主義は現在教育上の

新流行主義ではあるが、然も、決して、自然生活其まゝを生活せしめ樣とするものではない。子供の生活を教育的材料に因つて充實せしむることに因つて、將來の生活を教育の目的に合致せしめ樣とするもので、其生活の教育的充實に、數多の苦心と按配とを要するものである。決して、子供の自然生活其まゝを許せと云ふのではない。

又或人は「先づ其生活を充實せよ然して後徐ろに教育せよ」、「保育の第一歩は生活の充實であり、次に教育である」と云つて居る。此人の云ふ所に從へば、生活の充實は第一義であり、教育は第二義である樣だ。吾人は此說にも贊成は出來ぬ。是も、一種の墮落したる自然主義である。生活の充實は教育の圈外であるかの如く考ふる所に、子供の自然生活尊重の意味がある。尠くとも教育を離れて、子供の生活を考へ樣とする所に非教育的分子がある。吾人は子供の生活を教育的內容に因つて充實することを以て、生活卽教育の意義と考ふるものである。然るに、此主義者は生活の充實と其教育的誘導とは別問題の如く考へて居る。此主義者は三度の食事を自然生活と考へ、教育をば特殊の滋養劑と考へて居る樣である。先づ三度の食事を與へよ然して後滋養劑は必要に應じて徐ろに與へよと云ふのである。吾人は然うは思はぬ。吾人は三度三度の食事其ものを滋養に充たしめよ、夫れが卽ち教育であると解するのである。卽ち生活の充實は同時に教育でなければならぬと考へる。充實と教育とを別個の問題と解する處に誤謬は存する。此主義者は充實は先づ差當りの問題である。之を果した上に滋養劑を呑ませやうと考へて居るが、吾人は充實以外に滋養劑の攝取を排するものである。充實以上の教育を過剩視するものである。充實卽ち教育であり、教育卽ち充實であり、充實以外の教育、教育以外の充實を考へることは出來ぬと云ふのが吾人の建前である。斯くしてこそ始めて、生活主義の教育と稱することが出來る。生活卽教育とは此狀態を云ふので、「子供の自然生活其まゝが卽ち教育」であると云ふのではなくて、子供の生活其ものが、全く教育になる樣に按配しやうと云ふのである。

要するに、「自然の儘であれ」と云ふことを以て、自然主義と考へることは教育上の自然主義ではない。然りとて、自然生活の充實を計れ、然して後に、教育せよと云ふことも、自然主義の教育とは考へられぬ。是は恰も、食事は子供の自然である。好きなものを勝手に食はすがよかろう。夫れが即ち教育である。と考へると同樣である。そして、必要あらば更に滋養劑を與へ樣と云ふのと同樣である。吾人は斯る見解を採らぬ。吾人は食事を以て子供の自然と考へる。因つて、此食事の內容を吟味して滋養分に富ませて、自然の生活に、教育的內容を豐富に盛りたいと考へる。是が即ち教育上の自然主義であると解するものである。そして、食事材料として滋養のないものや駄菓子の類を排斥すると同樣に、藥劑としての滋養劑の攝取を排することが、最もよき自然主義であると信ずるものである。斯樣にしてこそ始めて、教育と生活とが一致するので、斯る境地に於ける教育こそ子供になくてはならぬ教育であり生活であると思ふ。「人は教育に因つて人と成る」とカントが云つたのも斯る教育の狀態を指すものではあるまいかと思ふ。然るに、論者は自然を其儘に尊重して、其自然があらぬ方面に方面に墮落して行くことを考へない。是れが誤りの根本である。斯る人は、好奇心は子供の自然であるからと云つて、駄菓子屋の店頭に子供を牽き付けて居る彼の「あて物」とか「めくり」とか云ふ種類の射倖心を挑發するものを平氣で子供に買はせるであらう。また、子供が玩具をこわしたり蟲類や犬猫をいぢめることも、子供の自然的生活であるからと云ふことで、容易に制し得ぬであらう。是等は何れも墮落した自然主義の弊害で吾人の注意し警戒しなければならぬ問題である。